

# 本願寺 尾崎別院



尾崎別院本堂

浜街道沿いの一草堂を淵源とし、准如上人のころ御坊となった尾崎別院。元禄の火災で伽藍を失うも、無事再建を果たし、その経緯から「不思議の御坊」と呼ばれた。

## 尾崎別院のいま

2025（令和7）年11月26日連夜から28日日中まで、尾崎別院（阪南市）において報恩講法要が修行された。

取材日の27日は、暖かな日差しが境内のイチヨウを金色に彩る小春日和の一日となった。

境内に集う参拝者は、皆なごやかに声



報恩講法要勤行のようす

をかけ合う。報恩講を前に、境内の掃除やお磨き、幕張など、総代や世話人、婦人会の方たちが何日もかけ準備を担ってきた。別院を縁とした日々の親交の雰囲気が境内を温かく包んでいる。

10時からの日中法要では奉讃大師作法（第1種）が勤められた。法話は奈良教区の布教使、日高法輝師が担当し、「教行信



歴史ある膳所でお斎の準備が着々と進む



昔ながらのおくどさんでの調理

証』のご文をとりあげ、親鸞聖人と法然聖人の出遇い、お念仏のみ教えの肝要を身近な話題を取り混ぜて説き、参拝者一同宗祖のご遺徳を偲ぶひと時となった。

日中法要後には対面所でお斎（炊き込みご飯、のっぺい汁、わらび餅）が参拝者にふるまわれた。前日の朝から仏教婦人会の方々が仕込みしたのっぺい汁は、膳所の昔ながらのかまどで炊かれたもの。大根も人参も里芋も、芯まで優しい味が染みとおり、多くの参拝者が楽しみにする逸品。別院の雰囲気とあいまって、温かさが心に染みる。

このお斎接待も、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、一時中断していたものを、2023（令和5）年に再開した経緯がある。

別院はいま、尾崎のまちづくりへのさまざまな取り組みの中心となっている。2024（令和6）年11月には対面所「鶴の間」の鶴をモチーフにしたキャラクター「尾つるちゃん」を地元の有志の協力を得て作成。「おてら食堂」の復活や、

子どもたちの集える場所を提供する「てらこや」おどきべついん」、阪南市と連携しての「ほればれ夜店」の会場となるなど、地域住民とともに進める取り組みに次々と参画し、皆が集う別院をめざしている。

地域の社会福祉にも積極的に貢献するとともに、本堂にスロープや段差の低い階段を設置するなど、どなたでも参拝できる環境を整備。「尾崎別院だより」の年3回の発行に加え、公式ホームページやインスタグラム、フェイスブックによる発信も始め、広く法要行事の案内や日々の活動などを随時発信している。これが功を奏し、日に日に賑わう境内に、いまや宗門のみならず行政や民間団体などの期待をも集める地域の拠点となっている。

## 尾崎別院の沿革

### ●不思議の御坊

尾崎別院のある大阪府阪南市尾崎町



境内のイチョウは樹齢400年以上とも。  
落雷で折れた今も本堂をしのぐほどの高さ

は、大阪から紀州に抜ける浜街道（孝子越街道）に沿った潮風薫る海辺の町だ。別院からほんの数分で、大阪湾に面した防潮壁にたどり着く。

「この地、南海四国の船懸りにして、賣人都会の地なり」  
あきびと

1796（寛政8）年刊行の『和泉名所図会』は尾崎の地をこう記した。

各地の船が停泊し、村は江戸時代を通

じて阪南市域最大の戸口を誇った。多くの村民が漁船を持ち、浜では魚肥となる干鰯が多くつくられた。

かつて漁師たちは、尾崎別院の樹齢400年ともいわれるイチョウの木を、海上からの目印にしたともいわれる。

尾崎別院は、織豊時代の末期、第12代宗主准如上人のころに御坊として成立した。商業と漁業の盛んなこの地の中心にあつて、人びとに「不思議の御坊」と呼ばれてきた。

近代に入ると、大阪湾沿いの尾崎一帯は風光明媚な避暑地として人気を集めた。明治期に作成され、大正期にかけて大流行した「鉄道唱歌」の第5集は、南海鉄道沿線の光景をこのように活写している。

北口いでて走りゆく 南海線の道すがら  
窓に親しむ朝風の 深日は

こ、よ夢のまに  
尾崎に立てる本願寺 樽井にちかき  
躑躅山 やまず来て見ん

春ふけて 花うつくしく咲く頃は

尾崎というと本願寺がその象徴ともされた。

### ●老父の残した名号

明治・大正期の小説家、田山花袋も淡輪付近の賑わいを記した一文のなかで、こう特筆する。

尾崎（駅）で下りると、そこには蓮如上人の直筆に成つたという六字の名号を本尊とした西本願寺の御坊があつた。俗にこれを尾崎御坊と言っている。

〔「京阪一日の行楽」〔淡の輪の海岸〕  
准如上人を開基とする尾崎御坊だが、さかのぼって第8代宗主蓮如上人の名号縁の寺として知られた。これは御坊の前身である草堂にまつわる、ある伝説が広く知られるからだ。〕

本願寺御門跡御坊 尾崎村にあり。  
初めはこの地の草堂にして、ある時一老父来たりて一夜を明かす。翌帰るに速んで、負ひ来りし笈をここに残す。その後これを開きみるに、内

に蓮如上人染筆の六字の名号、善導  
 大師釈文の一軸等あり。

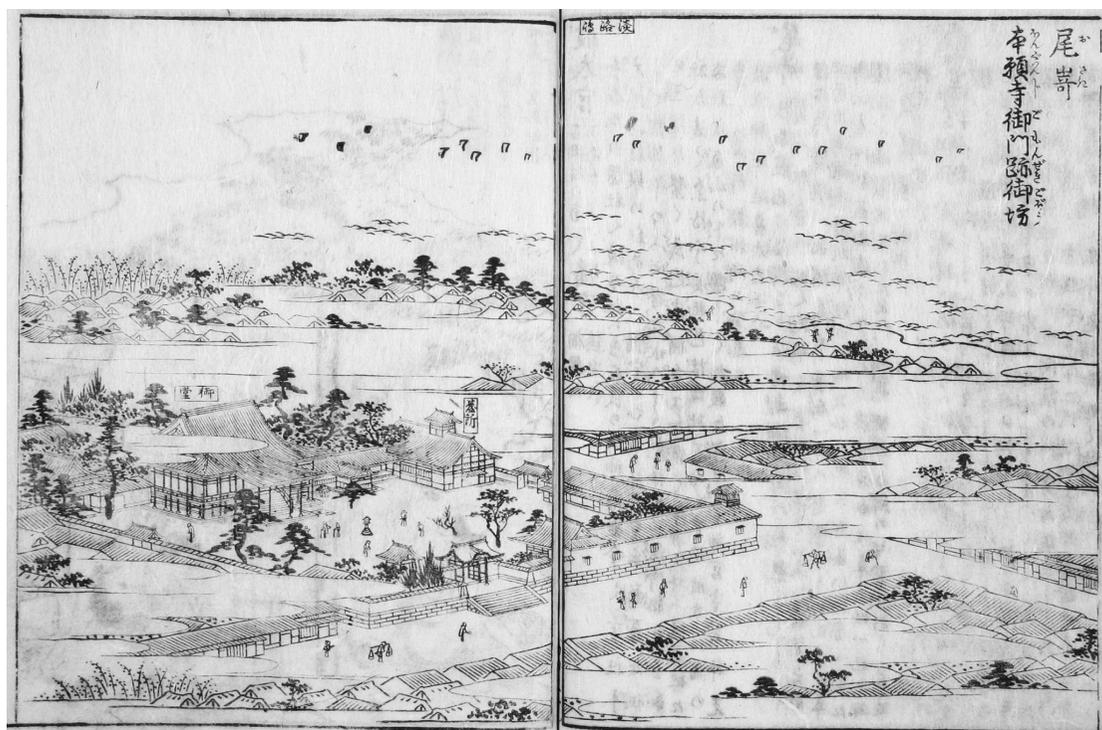
(『和泉名所図会』)

ここには尾崎御坊の淵源は、一老父が  
 置き去った笈に残された、蓮如上人の六  
 字名号を安置する草堂であると記されて  
 いる。

草堂の名は「善徳寺」であったとされ、  
 1691（元禄4）年の「日根郡今井七  
 良兵衛代官所寺社帳」にも、「西本願寺  
 坊、留守居」として「善徳寺演智」の名  
 がみえる。

実に各地の真宗教化の拠点は、蓮如上  
 人のころにつくられはじめた。まずは京  
 街道沿いに、次いで紀州街道などの交通  
 の要衝に御坊が建立されはじめる。

紀州街道沿いには、まずは堺に、続い  
 て天文年間以降、助松御坊、大津御坊、  
 貝塚御坊、佐野御坊が相次いで建立さ  
 れ、安土桃山時代の末になって、蓮如上  
 人の名号の伝説を持つ小さな草堂であっ  
 た善徳寺もまた、御坊へと転じること  
 になった。



1796（寛政8）年刊『和泉名所図会』に描かれた尾崎御坊。境内はほぼ当時の景観をとどめる  
 (国立国会図書館デジタルコレクションより)

●御坊としての成立

善徳寺が御坊となったのは、1598（慶長3）年で、准如上人のころだ。『和泉名所図会』はこのいきさつを次のように記す。

しかるに慶長三年、願主桑山伊賀守の家臣石田次郎左衛門といふもの、真宗をはなはだ帰依し、この地に新たに十間余の御堂を造立し、初めの本尊を移し、本願寺第十二代准如上人に寄附せしより、本願寺懸所となり、今、尾崎御坊と称す。

寺は桑山伊賀守の家臣で門徒の石田次郎左衛門が御堂を建立し、准如上人に寄進したことで御坊となった。

前身である善徳寺が火災で焼失し、この年に再建されたのか、この時にもとの寺地を拡張整備したのか、詳細はわからない。

●領主 桑山氏と尾崎御坊

准如上人に御坊を寄進した石田次郎左衛門の主君である桑山氏は当地の領主

で、伊賀守を名乗ったのは、桑山元晴（1563～1620）だ（寛永重修諸家譜）。

元晴は、豊臣秀長のもとで和歌山城代をつとめた桑山修理大夫重晴の二男で、1563（永禄6）年に尾張国に生まれた。はじめ豊臣秀吉に仕えて文禄・慶長の役に参戦し、1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは徳川家康方として戦功をあげている（『台徳院殿御実紀』ほか）。

真宗の門徒ではなかったようだ。しかし、桑山元晴と本願寺の縁は、この尾崎御坊にとどまらない。

現在の奈良県御所市にあたる、和州御所藩にあつた「御所御坊」もまた、天正年中に頭如上人が領主桑山伊賀守の寺地寄進を受けて御堂を建立したとの記録がある（『本願寺家系』）。

御所御坊は桑山氏の一門が住持し、一帯は寺内町を形成した。真宗寺院を中心とした町場形成は、豊臣系大名の特徴とも指摘されている。

この御所御坊に続き、尾崎御坊も

また、元晴のもと建立された。建立の年である慶長3年は、秀吉が逝去し、続く徳川の世を目撃とした時代の転換期にあたる。

「光隆寺知空師追日記」には、三十間余りの境内に、九間四面の堂が建立されたと書いている。普請にあつた石田次郎左衛門は、同書では桑山伊賀守の家老とされるが、詳らかではない。

御坊は教化の拠点とされ、歴代宗主もたびたび下向された。第14代宗主寂如上



現在の鐘楼と梵鐘



明如上人筆の本堂額と極彩色の組物の装飾



宝永2年再建時の棟札

人は御坊の洪鐘に、自ら銘を記されている（「光隆寺知空師追日記」）。

### ●火災からの再建

——「不思議の御坊」の由来と銭高組  
ところが1700（元禄13）年、11月20日、御坊は火災に見舞われた。伽藍や法宝物ともども焼失してしまうという大きな火災だった（「大谷本願寺通紀」）。

「光隆寺知空師追日記」によると、再建は奉行所より2年後には許可された。しかし、ここで尾崎村の人びとは途方にくれた。当地は実は、浄土宗の教勢が強い土地柄。門徒も少なく、御坊再建は不可能なことに思われた。

成すすべなく、4年の歳月が経った。そして1704（宝永元）年、嵐の翌朝。尾崎の浜に多くの巨木を積んだ船が漂着した。村人は、これを喜び、この木材を御坊再建の用材にあてた。翌年、念願の本堂再建が叶う。

この時、再建に携わったのが、泉州尾崎村で代々宮大工を家業としていた番匠

屋せむな銭高家の棟梁、銭高林右衛門だ。現代に続く銭高組の業祖である。

銭高組は、この尾崎御坊の落慶をもって、1705（宝永2）年を創業としている。のちに、社祖であり、尾崎村の名誉村長でもある銭高善造の村葬も、1932（昭和7）年4月に別院において営まれた。2025（令和7）年には、宝永の再建上棟式のあった9月18日に、銭高組創業320周年記念法要が別院において修行されるなど、いまでもそのご縁がながっているのが有難い。

現在の本堂などは再建時のもので、幾度かの修復を経ているものの、後世の改修はほぼ加えられず、地元の宮大工にはじまり、いまや国内外に多数の事務所を構える銭高組の技を伝えている。精巧にして実に重厚なつくりだ。

この宝永の再建にあたり、かつて紀州岡崎別院に安置されていた仏像を請うて本尊とした（「大谷本願寺通紀」）。

再建を切望するなか、折よく巨木が漂着し、実現したことから、人びとはいつ



重厚な彫刻が施された別院表門

しか、この御坊を、「不思議の御坊」と呼んだ。

●歴史のなかの別院

人びとの往来の要所、教化の拠点たる御坊に歴代宗主はたびたび下向し、教化につとめられた。

1720（享保5）年に寂如上人が別

院で行った帰敬式では、実に628人が受式したといい、その教化の充実ぶりがうかがえる（『大谷本願寺通紀』）。

第19代宗主本如上人は、当地の法義の繁昌ぶりを目の当たりにし、深く感嘆して随喜されたとある（『真宗史料集成』第6巻所収「本如集」）。

また、街道沿いにある御坊には、多くの人が逗留し、時に歴史的な出来事の舞台ともなった。

1805（文化2）年2月15日には、幕府の命を受け、測量を行っていた伊能忠敬一行が、尾崎村に逗留、御坊に宿泊している（『泉南市史』）。

1868（慶応4）年1月の鳥羽・伏見の戦いの際には、御坊に陣屋が設けられ、混乱と喧騒の舞台ともなった。

幕軍の敗走兵が紀州街道を南下し、その数2万とも3万とも言われるなか、当時会津藩領だった尾崎近辺の街道には、要所所に見張り所が置かれた。尾崎御坊の陣屋には、庄屋をはじめ毎日二百数十名の村民が日々交代で出仕したという。

「昨夜樽井に止宿した桑名勢700人が尾崎御坊に宿を借りに来る」等の誤報が飛び交い、御坊陣屋は一時騒然としたとの記録がある。（『町史こぼれ話』）

本堂をはじめ、庫裏、書院、玄関、茶所、長屋に土蔵、鐘楼に山門を備えた広い境内は、また、当地の象徴であるとともに、時代時代に公共的な用にも応えてきた。

明治初期には、境内に鳥取郷学校の分校が、その後、泉州三一番小学が設置さ



お茶所を改修した寺務所前には延享3年の茶釜・竈が残る

れ、その後整備された小学校への過渡的な役割を果たした。

### ◎佐世保移転を回避

開基である准如上人の300回忌法要予修のため、1901（明治34）年に修復をすませ（『明如上人伝』）、その記憶も新しい1909（明治42）年10月のこと。

本山よりある通知が尾崎別院にもたらされた。九州佐世保に移転すべき旨の、突然の通知だった。近郷に浄土宗が多いという実情を受け、護持に難ありと見てのことだった。

時に別院報恩講の最中で、報恩講の世話係だった樫井芳松は憤慨し、参拝の門徒たちに移転の是非を問うた。

「祖先以来、幾多の辛苦をなめながら護持した別院を移転するのは申し訳ない」

衆意は一致した。

翌年、本山は松井謹輔、上総政五郎、三井甚平の3人を呼び、移転を承諾するよう門徒への説得を依頼した。

それでも門徒たちの意志は翻らない。崇敬区域の門徒総会を開き、正式に護持を決議、番匠谷平吉、亀岡平三郎、塩野久七郎、茂野熊吉を勘定に推した。

肝煎の上総政五郎、三井甚平、樫井芳松の3氏と協力し、風雨寒暑を問わず東奔西走、離散した門徒の説得にあたること数年を経た。

当時で5千円という多額の懇志が集められ、これをもって別院の存続を成し遂げたのだ。彼らは1914（大正3）年12月26日、その功績を表彰されている。

危機に際し、護持はわれらの手で、と結束したことが、その後の別院の確たる基礎となった。

1924（大正13）年4月12、13日に修行された立教開宗記念慶讃法要には、婦敬式が本堂と対面所で行われ、1千375名が受式したとあることから、その努力の結実ぶりが偲ばれる（『教海一瀾』）。

### ◎平成の大修復

1985（昭和60）年。再建から年月



対面所でお齋をかこむ（2025年11月27日）

を経て、尾崎別院の伽藍の老朽化の状況は惨たるものがあつた。

院内建物は荒廃の限りをつくし、5年も6年も雨は漏り放題、まるで崩れ落ちるのを待つつかのようなありさまであつたという。



対面所の鶴の襖絵と  
別院のキャラクター「尾つるちゃん」



しかし、この時も、困難のなか、別院の修復を志す人びとが現れる。

約7年の歳月と総工費3億5千万円をかけた平成の大修復により、本堂の屋根、内陣、山門、庫裏が修復された。宝永2年の再建以来の大修復だった。

この大修復を経て、別院は「いまだこへ足を運んでも埃一つない、古さは古いままに歴史と伝統の趣がずっしりと重く漂っている。参詣・来院の人々の足音は絶えない」（『本願寺新報』昭和63年10月1日）とこととなり、再び活気を取り戻したのだ。

1993（平成5）年4月25日には、ご門主ご親修による「平成大修復落成慶讃法要」を修行した。前日のつどいと合わせて1千600人が参拝したと記録される。

この時も、別院を取り巻く環境は依然厳しいなかでの大修復だった。再び尾崎の地に、念仏への篤い思いが結集したことをもって、「まこと不思議の御坊」だと、当時の輪番はその感慨を記している。

元禄の火災からの再建といい、佐世保

移転通告の折といい、大変な状況から再び教化の拠点へ。いくどもの「不思議」の再興は、有縁の人びとの結束の結果生まれ、また新たなつながりを生んだ。

別院はいま、「ヨガ教室」や、地元の有縁者が主体となつて運営する町おこし事業「つどいの広場」の会場となるなど、新たなご縁の場を提供し、「開かれたお寺」「居場所になれるお寺」として地域と共に歩み続けている。

## 本願寺尾崎別院

大阪府阪南市尾崎町2丁目8番19号  
電話 072-472-4128

◎南海電鉄  
尾崎駅から徒歩で約3分

●報恩講  
11月26日～28日